

養老の詩歌

附公園の石碑

養老町教育委員会

養老の詩歌

附公園の石碑

発刊にあたって

遠く一三〇〇年ほど前、元正、聖武二帝の行幸を仰いだ養老。

いま養老の滝へ続く道に足を踏み入れると、幾多の石碑を目にし、たきみちに多くの文化の華を咲かせてくれていることに気が付きます。それには養老の詩歌を刻んだものが多く、古くから数多くの文人がこの地に憧れた証ではないでしょうか。

しかし、現在は、石碑のほとんどはいつだれが建立し、何が刻まれているのか判然としません。また、碑に刻まれていない素晴らしい詩歌も沢山あります。それらを知り、地域の文化を理解・伝承することは、真に地域文化の発展につながるものです。

時が流れ、数多くの詩歌や、それを刻んだ石碑の認知が薄れ、貴重な文化遺産が陰に潜んでしまっている気がしてならない今日この頃、本書はそれらを可能な限り収集し掲載致しました。また、今後郷土の歴史や文化財、養老の詩歌に親しんでくださる方々の基礎資料となることを目指し、作成致しました。郷土を愛することは、郷土を知ることからはじまるものです。この冊子がより多くの方々に利用され、郷土を知るきっかけや文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に、本書の発刊にあたり、調査活動や執筆等、多大なご尽力を賜りました山口一易氏をはじめ、沢山の碑や詩歌の保存、継承に努めてこられました方々に厚くお礼申し上げます。

平成二十六年三月

養老町教育委員会 教育長 並河 清次

はじめに

元正、聖武両天皇の行幸を仰ぎし歴史的背景の上に環境整備を為し、養老街道を設けるなど天下一大景勝地となった養老。多くの人々、特に文人墨客に親しまれ、当時の著名人によって名瀑を詠じた詩歌に恵まれ、稀にみる数多くの建碑を見るに至った。それらは先人によって、部分的記録によって紹介されて来た。

①昭和五十三年 養老町史 ②村上弁二氏の養老のいしぶみ（明治百年記念）③町商工観光課の養老の文学散歩・当芸野の残照（養老公園開設百年記念）④養老美泉（昭和六十年町教育委員会）⑤折々の養老町文化財保護協会誌など

最近は桜どき紅葉時を除いて養老を訪れる人は少なく特に文学作品を訪れる人は年々減少している、時の流れとはいえ一抹の寂しさを覚えるものである。

ここに養老公園に関するばらばらの作品をまとめて文学的名勝地養老をより深く知って欲しいと願うもの。然し浅学の私の手の届く範囲は狭くまだまだかくれた名作が存在することであろう。それらを今後の課題として養老改元一三〇〇年記念の日も近きこと、何かお役に立てばと思いつつ。

平成二十六年二月一日

山口 一易 記

凡例

- 一．本書の執筆は、山口一易が行った。
- 一．養老詩歌作品を便宜上次の様に分類、記述した。
 - 1．詩碑（建碑されている梁川星巖の養老改元詩碑を始め滝を詠んだ詩碑）
 - 2．詩林（紙上にのこる養老の滝を詠んだ詩作品）
 - 3．和歌・短歌（万葉集に収録されているうたをはじめ現代短歌、歌碑を含む）
 - 4．俳句（養老寺に奉納されている谷木因関係の句額はじめ建碑されている句碑など）
 - 5．歌謡（養老音頭など）
 - 6．その他の石碑（養老公園始め個人顕彰碑など）
 - 7．遺蹟（日本武尊当芸野遺蹟、元正・聖武天皇巡幸遺跡など）
- 一．漢詩文は、始めに原文を後に読み下し文を記すことにしたが、読み難い字句については
の形式をとったが、作者の意に適わない点多々あることを懼れるところである。
（意味）よ み

目次

一・詩碑……………10

1 濃州養老泉碑銘 備藩侍読近藤篤……………10

2 養老泉詩碑 樋口大治道順……………12

3 紀州藩主養老觀瀑詩碑……………14

4 瀧川惟一養老瀑泉詩碑（笠松郡代第十九代滝川小右衛門惟一）……………16

5 菊水銘碑 秦 鼎……………17

6 養老美泉辨碑 田中大秀……………19

7 寄題養老瀑布之碑……………22

8 養老改元詩碑 梁川星巖……………22

9 梁川星巖靈龜帝行宮古趾碑……………23

10 養老泉碑 土佐藩士 細川十州……………23

11 小自在庵平松南園詩碑……………24

12 富長蝶如養老大瀑詩碑……………24

二・詩林……………25

1 觀養老瀑 佐藤一斎……………25

3 觀養老瀑 藤井竹外……………26

5 汲養老美泉 雲華……………27

2 尋養老瀑作 賴 山陽……………25

4 遊養老道上 中川祿郎……………27

6 觀養老瀑布 浦上春琴①②……………28

7 觀養老瀑布 賴 華陽……………29 8 題養老泉 村瀨藤城……………30

9 遊養老山 山本梅逸……………31 10 養老瀑布 沙門王湛……………32

11 觀瀑 藤本鉄石……………33 12 菊水泉 張氏景婉……………34

13 養老美泉 日比野草川……………35 14 遊養老作 貫名菘翁……………35

15 遊養老山 戸倉竹圃……………36 16 觀瀑 田能村直入……………36

17 養老泉 大野百鍊……………37 18 養老孝子汲水詩 富長蝶如……………37

三. 和歌・短歌……………38

万葉歌碑 (元正太上天皇・大伴宿禰東人・大伴宿禰家持・沙彌滿誓)……………38

和歌 (風早実績・足代弘訓・田中大秀・八田知紀・本居宣長・田中道麿・糟谷磯丸・一

条兼良公・権少僧都玄覺・細川幽斉・馬場金將・浅草市人・樋口大治・高崎正風・

伊藤祐享・伊藤博文)……………40

歌碑 (浅学庵市人・北原白秋・長塚 節・園 喆善 八重子)……………42

短歌 (長塚 節・北原白秋・伊藤佐千夫)……………44

四. 俳句 (句碑を含む)……………45

句碑 (芭蕉・松廼舎子孝・耕月庵・理圭坊・長右衛門・一蓮青託生・芭蕉記念碑・大野

万木・石川桂郎・河東碧梧桐①・大橋敦子・宮野青芭・聴秋・河東碧梧桐②・山

田麗眺子・高木旭子・益井菊枝・合同句碑・高野素十・河瀬孝道・茂樹)……………45

有名人の句 (昭和五十五年養老公園開設百年記念冊子より9名)……………48

養老寺奉納額 (谷 木因関係31名)……………48

養老寺奉納懷紙（33名）

五. 歌謡

- 1 養老音頭 作詩 野口雨情 作曲 藤井清水 振付 島田 豊
- 2 滝の養老音頭 八島柳堂 宮崎光行 島村静司
- 3 養老小唄 河合 信 佐藤秀郎 藤間金三郎
- 4 養老音頭 野口雨情 藤井清水

六. その他の石碑

- 1 養老公園碑 松方正義題額
- 2 岡本喜十郎翁記念碑
- 3 渋谷代衛翁紀功碑 徳川義礼篆額
- 4 日比氏遺愛園亭記 小崎利準撰
- 5 孝道發揚之碑
- 6 十三代横綱鬼面山谷五郎顕彰碑
- 7 高橋先生之碑
- 8 當々先生寿頌之碑
- 9 立川勇次郎君碑

七. 遺蹟

- 1 日本武尊當藝野遺蹟
- 2 元正天皇行幸遺跡

3 聖武天皇巡幸遺跡	70
4 その他の碑	70
① 傷痕之碑・② 吉田寿山翁寿碑・③ 養老公園百年記念標板	70

一・詩碑

1 濃州養老泉碑銘 備藩侍読近藤篤識

元正御極王道平々 問民疾苦閔物則天
當耆之耄多度之山 天降嘉瑞地出奇泉
清潔可食養而不窮 人受其福王明之功
一飲一浴不老不死 衰耄再盛癯癯可起
有本如是萬古混々 君子是取鑒戒堪存
陵谷變遷湮晦是懼 於是建碑以識其所

乾隆五十年歲次乙巳正月吉旦

吳超程赤城書

碑の裏面に

乾隆五十年者當日本天明五年也

わかかへるとてしもよよに汲やしる 老をやしなふ多ぎ乃ながれに 七十九翁 墨川

⑧元正の御極王道平々たり。民の疾苦を問わせ物を閔み給うは天に則るなり。多芸の郡多度の山。天嘉瑞を降し地奇泉を出だす。清潔食むべく養つて窮らず。人其の福を受くるは王朝の巧なり。一飲一浴老いせず死せず。衰老再び盛んに癩癩起つ可し。本有ることは如く万古混々たり。君子是に取りて鑑戒存するに堪ゆ。陵谷の変遷湮晦是を懼る。是に於て碑を建て以てその所を識す。

岡山藩の儒者近藤篤が撰文し 当時来日中の中国の書家 程赤城が書いたものである。
元正天皇は七十七年九月御歳三十八才の御時養老の美泉に行幸。

同年十一月靈龜三年を改め養老元年となさしめ給う。

同年十二月立春の暁醴泉を汲んで都へ貢を命じ醴酒と為し給う

養老二年雪溶けを待ち再び養老の美泉に行幸永く御留連になつた

2 養老泉詩碑

樋口大治道順作

奥有山翁貧嗜飲 常思縱醉一厭然
婦宮紡績供衣食 子務樵蘇要酒錢
貞節絕倫驚上世 孝誠出類感旻天
夢中驚卵化金玉 巖下神靈涌醴泉
日夕把盃懷已足 時々浴躰病皆痊
從客共嘯旧棲月 返少遂成陸地仙
皇帝幸臨稱瑞物 國家大赦改元年
爾來養老流無盡 水性及今施德全
聞人や 袖ぬらすらんたらちねの 老を養ふ滝のむかしを
なる神の音かと聞けば多度山の 雪にとろくたきつ岩なみ

元文丙辰夷則上浣

濃之藝具押越村道順謹銘

① 奥に山翁有り貧にして飲を嗜す(たしなむ)

婦は紡績を営み衣食を供す

貞節は絶倫にして世を驚上す

夢中の鷺卵金玉と化し(わし)

日々盃を把つて己足を懐す(自分満足)

従客共に旧棲月を嘯す(きやく)
(もと月にすんでいた(うそぞく)

皇帝幸臨し瑞物を称す(賛える)

爾来養老の流は無尽たり

聞く人や裾ぬらすらん たらちねの老を養う滝のむかしを

なる神の音かと聞けば多度山の雪にとどろく滝つ岩なみ

常思縦酔一として厭然たり(深酔)
(平酔・従順)

子は樵蘇に務め酒錢を要む(新を拾ふ)

孝の誠出で旻天類感す(秋の空)

巖下の神靈醴泉を涌ぜしむ

時々躰を浴せば病皆瘥す(みな直る)

返少遂に陸地の仙と成る(仙人)

国家大赦し元年を改む

水性今に及んで徳全を施す(ありがたい恵)

元文丙辰夷則上浣
(元文元年(七三六)のえだ) (陰曆七月(上旬)

美濃国多芸郡押越村道順謹銘

樋口大治道順と号し御家流能書家 天明六年四月十日(二七八六)七十才没

3 紀州藩主養老觀瀑詩碑

濃之西南一帶山峰連絡七十余里 距伊勢界 古総称之多度 白石山麓有瀑布曰養老 旁
有湧泉 国史所載也 歲之丙辰 我 公自東武歸南紀 便道觀于此 俾陪駕之士作詩
臣川衡賦古體一篇以上

関山南折趨多度 六六奇峯峙水澗 白石之山何崔嵬 紫烟深处掛瀑布 氷柱抽雲明月宮
吳斧經營斲瓊璐 風潭日映吐彩虹 翠屏半蔽玄豹霧 千珠萬珠撲巖壑 俄疑振振集群鷺
沫飛細雨無晴陰 三冬不収雷震怒 借問何年銀漢水 掛向層厓半天注 壯觀对此信奇哉
凌斗仙槎直可沂 憶昔山中孝男兒 日夕樵采失歸路 班荆澗頭暫流憩 一掬神糞似甘露
汲去歸舍獻其親 霜髮還黑愈沈痼 聖明天子好神仙 蓬瀛大藥徒久慕 何知此泉能延寿
大守上言詳其故 意促鸞輿幸此鄉 応瑞改元保年祚 養老泉兮養老泉 永錫之恙垂竹素
爾来一千有余年 何人游躅追謝伝 我公述職歸南州 便道遊獵中山兔 泉石幽賞探奇蹤
按轡偶駐驂騶步 山靈相迎応接勤 爾歸汜灑風伯驚 列欠光流石扇開 雲裡仙人引相護
高牙大纛影縹紗 虎韞春映三花樹 周王八駿何足言 從行千騎宴玄圃 我本山下一布衣
承恩儒員辱眷顧 不才凶女欲頒清遊 詞篇希得江山助 林壑為我生光輝 唯恥甘泉乏獻賦

①濃之西南一帶山峰連絡七十余里、距伊勢界、古総称之多度、白石山麓有瀑布曰養老、旁

有湧泉 国史所載也、歳之丙辰 我公自東武歸南紀 便道觀干此 俾陪駕之士作詩 臣

川衡賦古体一篇以上

関山南折趨多度、六六奇峯峙水澗 白石之何崔嵬 紫烟深处掛瀑布 氷柱抽雲明月宮

吳斧経営斲瓊璐、風潭日映吐彩虹、翠屏半蔽玄豹霧、千珠万珠撲巖壑 俄疑振々集群鷺

沫飛細雨無晴陰、三冬不収雷震怒 借問何年銀漢水、掛向層厓半天注 壯觀对此信奇

哉 凌斗仙槎直可沂 憶昔山中孝男兒、日夕樵采失歸路、班荆澗暫流憩 一掬神糞似甘

露、汲去歸舍獻其親 霜髮還黒愈沈痼 聖明天子好神仙 蓬瀛大菓徒久慕 何知此泉能延

寿 大守上言詳其故 意促鸞輿幸此郷 応瑞改元保年祚 養老泉兮養老泉 永錫之美垂

竹素 爾来一千有余年 何人游躅追謝伝 我公述職歸南州 便道遊獵中山兔 泉石幽賞

探奇蹤 按轡偶駐驂 騶歩 山靈相迎応接勤 爾帰汜灑風伯驚 列欠光流石扇開 雲裡仙

人引相護、高牙大 纛 影縹紗 虎韞春映三花樹、周王八駿何足言、従行千騎宴玄圃、

我本山下一布衣、承恩儒員辱眷顧、不才妄欲頒清遊、詞篇希得江山助、林壑為我生光輝、

唯恥甘泉乏獻賦

紀州藩主十代治宝侯が儒臣の川合春川の勧めにより寛政八年三月参勤交代の帰藩の途次観瀑の折の春川の作詩である。後春川が交遊の誼篤き栗笠の佐藤与三郎宣衡に贈り 寛政十年二月一日佐藤宣衡が建碑したものである。

4 瀧川惟一養老瀑泉詩碑（笠松郡代第十九代滝川小右衛門惟一）

多度山高跨二州 飛泉百尺劈崖流

一条縞練懸如曬 萬點明珠碎不收

曾為先王療痼疾 又教孝子解窮愁

喜吾衰境受恩厚 千里來為養老遊

① 多度の山高く二州に跨り

飛泉百尺崖を劈きて流る

一条の縞練懸って曬の如く

萬点の明珠碎けて收らず

曾て先王の為痼疾を療し

又孝子をして窮愁を解くを教う

喜ぶ吾が衰境恩を受くること厚く 千里来って養老の遊びと為す

（文化九年大窪詩佛書にて建碑 元は滝谷の左岸 旧滝道脇の巨岩上にあつたが 十三号台風、伊勢湾台風の出水で河床へ転落 養老神社下紅葉橋を渡り少し登った山際に三度建碑）

5 菊水銘碑

秦鼎

尾張藩儒臣 菊水泉論者

養老之山靈泉出焉 名曰菊水 其香如名 其味如醴 又望瀑水於雲間 其布百丈 其沫如珠 千萬飛散不可為數量 故土人之言曰 得延年於如醴 算其壽於飛沫 啓二奇以高峙 答天瑞而紀季 實天下靈境也 今品天下之水 此當居第一 汲而釀酒矣可無銘 曰酒星昭回 靈泉日新 不疾不老 酌獻君新 二奇發跡 一見續記 一見萬葉集 十訓著聞等書亦載幸感事 嗚呼靈泉之為靈也久矣 但其山名養老 泉稱菊水 起於後人菊一名延年 今山生之金英皇々 亦可謂名下不虛也 水服二子相謀 勤銘山石 即歷萬歲 人与石偕不老

文化十三年丙子重陽

尾張儒臣

秦鼎撰

大清環翠

江大 乘書

美濃今尾

水谷直方 建

尾張城下

服部正直

尾張秦士鉞公 托詛官點儀 鄉先生委 此碑字於楣 楣讓之家兄稼圃 兄之年已至耄

其身 在西海萬島之重 其字勒之東海養老仙山 与楣可謂仙山媒矣

嘉慶庚辰歲九月吉

姑蘇藝閣江大楣記當湖品三陸如金書

①読 養老の山に靈泉出づ、名付けて菊水と曰う。其の香名の如く其の味、醒れいの如し、又瀑水を

雲間に望のぞみ其の布百丈其の沫しづみは珠の如く、千万に飛散し數量為す不可べからず。故土人その土地の人の言に曰

く延年醒えんねんの如きを得、其の寿は飛沫しづみに算じ、高峙こうしを以て二奇を啓ひらく。天瑞てんずいに紀季ききして答う。(養老と改元したことを)

実に天下の靈境也なり。今品天下の水、此れまさに当居第一。汲ひて釀酒じょうしゅとす。銘無なる可いし。曰いわく

酒星しゅせい昭回 靈泉日進 不疾不老 酌獻君新 二奇発跡 一見續記 一見萬葉集 十訓著聞(十訓抄) (古今著聞集)

等書亦幸感事を載す、嗚呼靈泉の為に久に靈地となる。但し其の山の名は養老、泉は菊水

と称す。後人菊一名延年を起す。今山生の金英きんえい皇々くわくわくと輝き、亦名下なに虚ふは不べと謂いふ可べき也。

水服二子相謀り山石に銘し、即ち万才(万年)に曆す。人も石も偕いに不老。

文化十三年丙子重陽(九月九日)

尾張儒臣 秦 鼎撰

大清環翠 江大 乗書

美濃今尾 水谷直方 建

尾張城下 服部正直

尾張秦士鉉公、訳官点儀先生に委托し 此の碑の字を楣ひに委す 楣讓の家兄稼圃。兄の年

已すでに耄もつに至り 其身西海万島の重に在り其の字東海養老の仙子が勒ぼす 楣ひは仙山(仲たち)を媒ばいせし

と謂う可いき矣

嘉慶庚辰歲九月吉 姑蘇芸閣江大楣記当湖品三陸如金書

日本根子高瑞淨足姬天皇 天下所知看斯大御代邇 美濃國當耆郡多度山爾 醴泉顯祁理
靈龜三年登云年之九月 天皇其地爾幸行而 大御體乎滌賀志都流邇 御痛悉爾除古理
病人諸癒多理岐 故同年之十一月 天皇我大御命良麻登詔賜良久 書邇 醴泉者美泉可
以養老登云幣理 此者天神地祇乃 相宇豆奈比福波閉奉礼疏 大瑞乃物曾登 神隨母所
思行歡賜弓 靈龜三年乎改養老元年登為弓 御世之号登定賜伎 又同年之十二月 美泉
乎把弓令獻而 醴酒為賜比 明年乃二月邇母 其地行幸伎 抑如此嘉賜波志斯其美泉者
今所謂多耆郡那流養老之瀧那母其那疏 然乎御代之御紀爾 美泉醴泉登能微記佐延而有
者 其地之山口邇甚寒伎泉之在乎 其彼泉登思惑閉流人多迦理 美泉者 宇都母那久瀧
那流由者 天爾國押開豐櫻彥天皇 天平之十年餘二年登云年之十一月 伊勢國爾幸行弓
壹志郡河口之関宮邇大坐麻志弓 還佐波美濃國爾巡良斯弓多芸行宮邇四日逗坐伎 其時
御供爾仕奉禮疏 大伴宿禰東人 從古人之言來疏老人之變若云水曾名爾負瀧之瀨 大伴
宿禰家持 田跡河之瀧乎清香從古宮仕兼多藝乃野之上爾 登作歌以弓知良延多理 又人
能子之老多琉父乎養都登云物語母 浮多流後世之作事曾与 御世之号乃義者大詔詞爾明

那琉乎夜 大秀瀧下邇到而歌曰古耶那須宇麻志伊豆美登意富伎美能 伎許志米伝那牟
多岐能勢叙許禮 如此云者 文化十年餘二年登云年之五月能塑日 飛驒国大野郡高山里
御民田中大秀

〔讀〕

日本根子高瑞淨足姬天皇、天下所知看斯大御代邇、美濃國當耆郡多度山爾、體泉頭那
理、靈龜三年登云年之九月、天皇其地爾幸行而、大御體乎滌賀志都流邇、御痛悉爾除
古理、病人諸癒多理岐、故同年之十一月、天皇我大御命良麻登詔賜良久、書邇、體
泉者美泉可以養老登云幣理、此者天神地祇乃、相宇豆奈比福波閉奉礼琉、大瑞乃
物曾登、神隨母所思行歡賜弓、靈龜三年乎改養老元年登為弓、御世之号登定賜
伎、又同年之十二月、美泉乎把弓令猷而、醴酒為賜比、明年乃二月邇母、其地行幸伎、
抑如此嘉賜波志斯其美泉者、今所謂耆郡那流養老之滝那母其那琉、然乎御代之御
紀爾、美泉體泉登能微記佐延而有者、其地之山口邇甚寒伎泉之在乎、其彼泉登思惑
閉流人多邇理、美泉者、宇都母那久滝那流由者、天爾国押開豊櫻彦天皇、天平之十
年餘二年登云年之十一月、伊勢国爾幸行弓、壹志郡河口之関宮邇大坐麻志弓、還佐波
美濃国爾巡良斯弓多芸行宮邇四日逗坐伎、其時御供爾仕奉禮琉、大伴宿禰東人從古

人之言来琉老人之变若云水曾名爾負瀧之瀬、大伴宿禰家持、田跡河之瀧乎清香従古宮
仕兼多藝乃野之上爾、登作歌以弓知良延多理、又人能子之老多琉父乎養都登云物語
母、浮多流後世之作事曾与、御世之号乃義者大詔詞爾明那琉乎夜、大秀瀧下邇到而
歌曰古耶那須宇麻志伊豆美登意富伎美能、伎許志米伝那牟多岐能勢叙許禮、如此云
者、文化十年余二年登云年之五月能望日、飛驒国大野郡高山里御民田中大秀

田中大秀 飛驒高山の人・安永六年（一七七七）生れ七十一才で歿 熱田の社司栗田知周に就き歌道
を学び後本居宣長に師事する

7 寄題養老瀑布之碑

懸瀑曾聞養老奇

銀河直下九天垂

他年若得々携杖

傾蓋吟囊洗拙詩

敬重

①懸瀑曾て聞く養老の奇

銀河直下九天より垂る

他年得々携杖に若ず

蓋を傾け囊を吟じ 拙詩を洗う

裏

文政辛己夏日

當々 利茂 米齋 松葦

文政辛己夏日 建碑者名

檜堂 松石 月所 菊泉 全建

8 養老改元詩碑 梁川星巖 六十八翁梁孟緯

養老改元光史編 至今百丈瀑泉懸 ①養老改元は史編を光す 今に至って百丈の瀑泉懸る

寒風珠玉噴為雨 白日雷霆轟在天 寒風 珠玉噴いて雨と為り 白日の雷霆轟いて天に在り

萬乘宸遊良有以 四疆民瘼果皆痊 万乗の宸遊は良に以有り 四疆の民瘼果して皆痊ゆ

滂沱不晷大君澤 盥沐何唯千億年 滂沱として晷ず大君の沢 盥沐すること何唯千億年のみならんや

(明治四十三年庚戌三月十二日建之)

昭和五十六年六月の大水害により滝壺周辺に埋没)

9 梁川星巖靈龜帝行宮古趾碑

澗邊芳草瑶簪挺

①澗邊の芳草 瑶簪を挺んず

巖畔鳴泉玉佩分

巖畔の鳴泉 玉佩を分つ

曾是六龍巡幸地

曾是 六龍 巡幸の地

滿山佳氣尚氤氳

滿山の佳氣 尚氤氳

(養老神社拜殿 右手前)

10 養老泉碑 土佐藩士八十翁 細川十州

一脉甘泉似醪醴

①一脉の甘泉醪醴に似たり

誰將至性動山靈

誰か將に至性をもつて山靈を動かす

学童今日多豚犬

学童今日豚犬多し

樵子何曾讀孝經

樵子何ぞ曾て孝經を讀まんや

(養老神社の東 美泉の傍 大正十二年)

11 小自在庵平松南園詩碑

聖天子世孝兒出

① 聖天子の世孝兒出づ

感孝山靈此涌泉

孝に感じて山靈此に泉を涌く

泉水一從能養老

泉水一たび能く老を養いて從り

名山名水又名年

山に名づけ水に名づけ又年号に名づく

(南園は、美濃国安八郡小野村(三城村) 専勝寺住職

昭和五年霜月遺孫等によつて建立)

12 富長蝶如養老大瀑詩碑

富長覺夢八十一才作

湯湯大瀑響溪山

① 湯々たる大瀑溪山に響く

神骨洗來雲霧間

神骨洗い来る雲霧の間

一自靈泉變為酒

一度靈泉の變じて酒と為し自り

到今養老是仙寰

今に到るも養老は是れ仙寰

(富長蝶如・覺夢 養老町室原長願寺住職 漢詩人

昭和五十一年文化の日建立 紅葉橋近く リフト乗場の下)

二 詩林

1 觀養老瀑 佐藤一斎

微服尋山混旅人
來觀飛瀑掛嶙峋
巖頭磅礮心堪洗
何心解衣灌此身

〔讀〕

微服山を尋ねて旅人に混ず
來り觀る飛瀑の嶙峋に掛を
巖頭磅礮心洗ふに湛えたり
何んぞ必ずしも解衣この身に灌がん

(佐藤一斎岩村藩士 文政四年(一八二二) 村瀬藤城と養老觀瀑)

2 尋養老瀑作 賴 山陽

碧樹千層遮日青
遙聞飛瀑撲崖鳴
縱然未見跳珠瀉
耳畔淙々涼己生

〔讀〕

碧樹千層日を遮つて青く
遙かに聞く飛瀑の崖を撲つて鳴るを
縱然として未だ見ず跳珠の瀉を
耳畔淙々として涼己に生ず

(文政十一年(一八二八) 六月高田へ遊歴・觀瀑)

3 観養老瀑 藤井竹外

遥望丹崖佳氣浮 却懷當日駐龍輶

水簾一幅誰編出 垂到千年猶未收

豈能黃鳥出幽谷 雪壓梅花凍不開

桓敵寒威唯瀑布 打崖激石響如雷

①読 遙かに望む丹崖佳氣の浮ぶを 却かつて懷う當日りゅうちゆう龍輶とを駐めたまいしを

水簾れん一巾誰か編み出だす 垂（ふり返つて）れて千年に到るも猶未なほいまだ收おさまらず

豈（すたれ）に能く黃鳥（鶯）幽谷を出でんや 雪は梅花をあつ圧して凍りて開かず

寒威に抵敵するはたゞ（た）瀑布 崖を打ち石に激して響は雷の如し

（竹外は号、摂津の人 高槻藩士 頼山陽に学び詩を能くす）

4 遊養老道上 中川祿郎

蓑笠従黄犢 長塘醉欲消
寺依殘罌雨 村隔落花橋
角立巒光積 爪分河勢驕
名泉行指點 大霧涌山腰

①蓑笠（さりゆゆう）黄犢（きんご）を従へ 長塘（ちやうたう）に酔ひ消さんと欲す
（みのかさ） （子牛） （堤）

寺は殘罌の雨により 村は落花の橋を隔つ

角の如く立ちて巒光積み 爪の如く分れて河勢は驕る
（めぐり連なつた山）

名泉行く行く指点す 大霧山腰に涌く

（彦根藩の国学者 頼山陽の門下に入る。末年井伊直亮の儒臣）

5 汲養老美泉 雲華

浄出靈泉養老年
至今清潔説因縁
我酌一瓶観命久
無由風樹奉先人

①浄く靈泉を出だす養老の年

今に至りて清潔 因縁を説く

我一瓶を酌んで命を観ずること久し
（びん）

由なし風樹先人に奉ずるに
（よし）

（雲華は号 豊後の人 東本願寺の講師 頼山陽と親交あり）
天保年中の人

6 観養老瀑布 浦上春琴①

蒼々絶壁罩雲烟

① 蒼々たる絶壁雲烟を罩め

黄菊花馨秋晩天

黄菊花馨る秋晩の天

聞説瀑泉能養老

聞くならく瀑泉能く老を養うと

使人頻想一千年

人をして頻りに想はしむ一千年

（春琴は号、備前の人、山水花鳥画を能くす
弘化三年（二八四六）五月二日 六十九才で歿）

浦上春琴②

入山纔数里 忽見瀑泉明

② 山に入ること纔かに数里 忽ち見る瀑泉の明かなるを

樹古高無際 石聳激有聲

樹は古く高きこと際しなく 石は聳えて激して声あり

靈禽呼暮走 遊鹿趁秋鳴

靈禽暮を呼んで走り 遊鹿は秋を趁ふて鳴く

應喜今宵宿 心清夢亦清

まさに喜ぶべし今宵の宿 心清くして夢もまた清からん

観養老瀑布

頼 華陽

飛泉掛蒼壁

① 飛泉蒼壁に掛り

山静響浣々

山静かにて浣々かんと響く

直下三千尺

直下す三千尺

流溶走白龍

流溶白竜走る

(華陽は頼 山陽の孫 書画の鑑定家として知られる)

8 題養老泉 村瀬藤城

人間到處變遷同 不破不唯関月空

珍重元皇一条水 潺湲長掛白雲中

山擁奔泉碧萬層 滿空晴雪蟄衣稜

居然觀得玉龍戰 三十六峯鳴欲崩

誰向奔泉碧扇揮 水痕乱點碎珠璣

匹似漢宮翠蛾手 玉階撲得夜螢飛

① 人間到る処變遷同じ 不破は唯関月の空のみならず

珍重す、元皇一条の水 潺湲長く掛る白雲の中

山は奔泉を擁して碧萬層 滿空の晴雪衣稜を蟄す

居然として觀得たり玉龍の戦ふを 三十六峯鳴つて崩れんと欲す

誰か奔泉に向かつて碧扇を揮ふ 水痕は乱点して珠璣を碎く

匹はだ似たり漢宮翠蛾の手 玉階に撲ち得たり夜螢の飛ぶを

村瀬藤城 美濃国上有知の生れ 頼山陽門下 梁川星巖との交遊篤相謀り

西濃に詩社白鷗社を創立 弟に立斎・秋水 嘉永六年九月三日 六十三才で歿

石上煎茶拂緑苔

欲模真景倚崔嵬

靈泉一洗心胸去

更貯千巖萬壑来

① 石上に茶を煎て緑苔を払ひ

真景を摸せんと欲して崔嵬に倚る

(石や岩のころろして険しい山)

靈泉は心胸を一洗して去り

更に千巖万壑に貯へ来る

尾張の人 後京師に住む 山水人物花鳥画の名手

晩年は故郷に帰り安政四年（一八五七）六十八歳にて歿

10 養老瀑布 沙門玉湛（養老町高田出身）

元正震遊天下傳 青松映日紫雲懸

濃南第一佳山水 萬仞龍門吼瀑泉

黃稻紫芋青野行 山中孝子美泉名

千穉尚怪變輿至 流水觸巖飛雪聲

①讀 元正の震遊しんゆうは天下に伝う 青松日に映じて紫雲懸かかる

濃南第一の佳山水 万仞の竜門瀑泉吼ほゆ

黄稻紫芋青野を行く 山中の孝子美泉の名

千穉あや尚怪あやしむ變輿らんよの至るか天子の車と 流水巖に触れて飛雪の声あり

安永七年島田村高田に生る 幼小にして莊福寺の範慶和尚の徒弟
となり得度、武州野火止平林寺の住職京都花園妙心寺の輪番を勤
む 文久元年（一八六一）正月二十九日八十四才にて歿

11 観瀑 藤本鉄石 安政二乙卯年（一八五五）三月十九日

観感降靈養老年

①観て感ず降靈養老の年

応膺大旱幸南淵

②まき 応に大旱かんに膺こたえて南淵に幸す

雨珠連涵膏澱壤

③雨珠連涵めんとして波壤はじょうを膏こうじ

飛沫蒼茫覆普天

④飛沫蒼茫として普天を覆う

流注有聲而有實

⑤流注声有りて実あり

洽濡如石且如泉

⑥こうじゆ 洽濡石の如く且つ泉の如し

渴望無復若人在

⑦渴望またかくのごとき人の在る無し

澗酌否趨尚那邊

⑧か 澗に酌んで吾は趨りて那邊にか向はん

備州藩の士 文久三年（一八六三） 同士と侍従中山忠光奉じて義兵を
挙げ四十七才にて戦死

張氏景婉

（梁川星巖の妻 号は香蘭 詩書を能くす
明治十二年（一八七九）七十六才没）

觥沸靈泉瑞氣攢 元皇曾此駐和鸞

三歲時應萬民活 大赦詔降天下歡

水練光飛巖樹潤 佩環聲碎雪花寒

千秋渴仰女堯舜 混々有原長不乾

①讀 觥沸靈泉瑞氣攢あつまる 元皇曾かつて此こゝに和鸞わらんを駐あむ
（泉がわき出るさま） （むつがる）

三歲時まさに万民活いく 大赦たいしやの詔降くだりて天下歡よろこぶ

水練光飛とんで巖樹潤うるい 佩環はいかん声碎こぼけ雪花寒やぶし
（腰に付ける玉状のもの）

千秋渴仰せうおほす女の堯舜ぎょうしゆん 混々まぎまぎとして原はらありて長ながく乾かわかず
（中国古代の聖天子である堯帝と舜帝徳のある）

13 養老美泉 日比野草川（高田町の人）

養老靈蹤何処求

或稱菊水或飛流

近來諸哲爭非是

喧似溪雷鳴不休

① 養老の靈蹤（靈蹤） 何処にか求めん

或は菊水と稱し或は飛流と

近來諸哲非と是を争ふ

喧（けん）なることは溪雷の鳴りて休まざるに似たり
（かまひすしい）

（金草川の涯に居する 白欧社人 父は画家の鶴翁）

14 遊養老作 貫名菘翁（海屋）

夢断溪頭山雨鳴 其溪其雨未分明

朝暎紅澆羅窓外 依旧溪声作雨声

雨送微涼河漢空 小簾影裏早涼通

欲知小圃秋容淡 細竹疎蕉一霎風

① 夢断えて溪頭に山雨鳴る それ溪それ雨 分明ならず

朝暎（あき）の紅は澆（は）す羅窓（らそう）の外 旧に依りて溪声雨声となす
（日の出） （とびちる） （あみ・うすもの）

雨は微涼を送りて河漢（かかん）空し 小簾影裏（すだれ）に早涼通ず
（天の川・銀河）

知らんと欲す小圃秋容の淡きを 細竹疎蕉一霎（ほしやう）の風
（はたけ） （かたち） （すがた） （小）

15 遊養老山 戸倉竹圃（養老町大跡）

多度山頭宿雨乾 登々一路出林端 ①多度の山頭宿雨乾き 登り登りて一路林端を出ず

千年古廟存靈跡 百尺危樓供壯觀 千年の古廟靈跡を存し 百尺の危樓壯觀を供す

雲表影沖松頂鶴 瀑邊香迸石根蘭 雲表に影は沖す松頂の鶴 瀑邊に香は迸る石根の蘭

掃苔題破新詩句 風捲入衣特地寒 苔を掃つて題破す新詩句 風は人の衣を捲いて特地に寒し

大跡の人 詩文をよくし書道にも巧み

明治十四年（一八八一）九月二十七日五十才にて歿

16 觀瀑 田能村直入 明治十七年（一八八四）甲申十月

養老山中幹瀑布 ①養老の山中に瀑布を觀る

霜林紅紫葉如花 霜林の紅紫葉花の如し

昔聞孝感泉為酒 昔聞く孝感の泉酒となるを

今日風流の作茶 今日の風流之を茶となす

豊後の人 田能村竹田の養子となり山水南画を能くす

明治四十年（一九〇七）九十四才にて歿

17 養老泉 大野百鍊

大瓢貯仙液 日捧阿爺前

孝旨汲不竭 鑿々千億年

大瓢貯花月 日捧阿爺前

孝旨斟無盡 鑿々千億年

①讀 大瓢に仙液を貯え 日に阿爺の前に捧ぐ

孝旨汲めど竭きず 鑿々たり千億年

大瓢に花月を貯え 日に捧ぐ阿爺の前

孝旨斟めども尽くるなし 鑿々たり千億年

(大垣の人 大正八年(一九一九) 教職を勇退後書の研究に専念す)

18 養老孝子汲水詩 富長蝶如

(養老町室原)

回巖古木罩雲烟

養老山中大瀑泉

掬得樵夫汲餘水

遺醺不盡一千年

①讀 回巖古木雲烟を罩む

養老山中大瀑泉

掬し得たり樵夫汲余水

遺醺尽きず一千年

三・和歌・短歌

万葉歌碑

元正太上天皇歌

富等登藝須奈保毛那賀奈牟母等都比等可氣都都母等奈安乎禰之奈久母

① 読 ほととぎす なほもなかなむ もとつひと かけつつもとな あをねしなくも

(万葉集 卷二〇)

美濃國多芸行宮大伴宿禰東人作

従古人之言来老人之變若云水曾名爾負瀧之瀨

① 読 いにしへゆ 人の言ひくる 老人の をつとふ水ぞ 名におふ 瀧の瀨

(万葉集卷六 一〇三四)

大伴宿禰家持作

田跡河之瀧乎清美香従古宮仕兼多藝野之上爾

① 読 たどかわの瀧をきよみか いにしへゆ 宮つかへけむ 多芸の野のへに

(万葉集卷六 一〇三五)

沙彌滿誓

世間乎何物爾將辟旦開榜去師船之跡無如隰歌

①読よのなかを 何にたとへむ あさびらき こぎいにし船のあと なきごとしか

白縫筑紫乃綿者身著而未者伎禰杼暖所見

①読しらぬいの つくしのわたしは みにつけて いまたはきねど あたたけくみゆ

笠朝臣麻呂 沙彌滿誓

慶雲三年 美濃守

養老三年 美濃尾張參河信濃の按察使あせち

養老五年 官を辞し仏門に入り笠沙彌滿誓

養老七年 造筑紫觀世音寺別当

(万葉集 卷四 右三三六 左三五二)

和歌

(昭和二十四年三月二十日発行 濃飛の文学 岐阜県教育委員会編より)

名も老を養ふ瀧と聞くからに きくの泉のわかへつつ見む

風早 実績(公卿公長の男 参議中納言 宝暦年中の人)

流れての世にも名高く聞えけり 老いを養ふ瀧のひびきは

足代 弘訓(江戸末期の国学者 伊勢外宮の神官 寛居(ゆたい)と号した 安政五年歿)

こさけなすうまし泉と大君のきこしめでけむ瀧の瀬ぞこれ
(醴酒)

田中 大秀(国学者 宣長の門 高山の人 荏野翁えなと号した 養老美泉弁碑建立 弘化四年歿)

昔より名にも流れて老人の齡をつなぐ瀧の白糸

八田 知紀(鹿兒島藩士 明治六年歿 江戸末期の歌人)

田跡川の水のゆかりをたづね来てあふぎにやどる滝のした風

本居 宣長 江戸期(国学者)

わが庵は老いを養ふ滝つせの枕にひびく多芸の野の原
治まれる御代のためしか田跡川の老を養ふたきつ岩浪

老人を養ふ御代の春にあひて名におふ滝のおとぞさやけき

多芸の原の萩の錦をぬはんとや霧立秋の滝の白糸

などあれと契りし事を田跡川の滝つ瀬のごとたゆと思ふな

老人を養ふ滝の水てや田跡の川音きこえざるらん

岩はしる滝の山川ゆく水の音にし夏をわすれつるかも

かきくもり小雨そほふる田跡川の滝のほとりは夏も寒けし

田中 道麿（国学者 宣長の門 万葉集の研究 天明四年歿）

（田中道全歌集より）

親のためつくすまことを水にせで酒とくませし滝は此滝

糟谷 磯丸（愛知県渥美郡の人 天保十三年六月十八日七十九才 養老の滝を観る）

わかえつゝ見るもよしがな滝の水老ひを養ふ名に流れなば

一条兼良公

美濃の国たきの野の上に宮居せし跡は流れて滝の残れる

権少僧都玄覚

わきてあはん下くぐる水のすゞしきをむすぶ心のきよくもあるかな

細川 幽斎

酒の香のたえて久しくなりぬれば山に酔ひたる養老の滝

馬場 金将

孝行のこころを天も水にさす酒とくまする養老の滝

浅草 市人

聞く人や袖ぬらすらんたらちねの老を養ふ滝のむかしを

樋口 大治（養老町押越）

大君の御手にかかりし滝つ瀬に帰らぬ老の波やなからむ

高崎 正風（歌人 鹿兒島県）

波元はいづつなるらん養老の峰より落つる滝の白糸

伊藤 祐享すけゆき（日清戦争時連合艦隊司令長官 鹿兒島県）

養老の清き流れにすむ人はつもるよはいの数も知らまし

伊藤 博文（明治三十一年来養）

（昭和六十年 養老町教育委員会発刊 養老美泉より）

歌碑

孝行のこころを天も水にせす酒と汲する養老の瀧

裏 文化十三年丙子六月吉日 浅学庵市人

浅学庵市人

紫蘭さいていささか紅き石のくま目に見えて寿々し夏去りにけり

北原 白秋（詩人・歌人 昭和二年来養 昭和十七年歿）

しろたへの滝浴衣掛けて干す樹々の桜は紅葉しにけり

長塚 節（歌人小説家 正岡子規の門 明治三十八年来養 大正四年歿）

美まかりし母のこととも思ひ出でて袖ぬらしけり養老の瀧

裏 昭和乙巳霜月吉日 復元 東京在住 園 喆善謹建

八重子

（孝子の墓近く）

短歌

滝の辺の槭もみじの青葉ぬれ青葉しぶきをいたみ散りにけるかも

落葉せるさくらがもとの青芝に一むらさみし白萩の花

多度山の櫟がしたに刈る草の秣が滝はよらで過ぎゆく

長塚 節（歌人小説家明治三十八年来る二十七才時の作）

春あさみせとの水田のさみどりのねせりは馬にはまれたりけり
石へのはしの落葉はけさはきてまたながめをりちりたまるを

北原 白秋（詩人歌人昭和二年来養 大阪毎日新聞社 新日本八景 審査）

山本の里の小立の夕煙紅葉を占めし家居しぬばゆ

いにしへの御世の御歳の名に負えるめづらみ滝をきょう見つかるかも

くれの色滝のとどろきいにしえも今の如けむ人に逢いかたし

多度山の千代の泉やしが後は親おもう子にまた逢わずけむ

いみじかる滝のしるしに力士ちからおの荒雄常陸が病癒きや

うつそみに背くすべなみ山くだる吾を呼ばぬか多度の山祇

伊藤左千夫（歌人 小説家 大正二年歿 紀行文「西遊目抄」 養老の滝 養老の朝より抜粋）

四・俳句

句碑

芭蕉

むすぶより早齒にひびく泉か南

裏面 名にひびく泉や瀧のとこしなへ 魯松庵

魯松庵・大野町の人 美濃再和派十三世道統

この碑は耕月庵が十四世道統継承記念に建立（嘉永七年）

松廼舎子孝

（まじのや）

若かへるすへも自然や掬ふ瀧

裏面 明治十四年三月中旬押越村信七正信

耕月庵

孝の徳世々になかれて瀧すすし

裏面 明治十年丁丑十二月戸倉竹圃建立

耕月庵は大跡の人 芭蕉再和派十四世道統をつぐ

竹圃は耕月庵の女婿詩文をよくする

理圭坊

消ゆるともよし正風のみ濃の雪

裏面 明治十七年丁丑十二月戸倉竹圃建立

理圭坊は山口県周防柳井の人 明治二年 遠州秋葉神社参

拜の途次病を得て耕月庵宅に養生中に歿 当時耕月庵宅に

は俳句勉強中の弟子が多かったと

長右衛門静和坊

萍うきくさや登とど々ま満みる處ところに花の咲く 下笠旭松庵静和坊

裏面 明治十二年卯六月下笠村田中泰造重政

一蓮青託生

飛水やむべ養老の春こころ

芭蕉記念碑

ちやは哉せ翁を（者世越翁・養老寺境内）

大野万木

去りがたき瀧の養老夕もみじ

（万木は政治家大野伴睦氏の号 養老郡の有志者により
昭和三十五年九月建碑される 南の滝みち沿い）

石川桂郎

滝の中逆のぼる水のありにけり

河東碧梧桐①

庵に在りて風瓢々の夏衣

（昭和九年より十一年まで数度 門弟岐阜鏡島の塩谷鶴平氏の
案内で来養 昭和五十五年建碑 親孝行のふるさと会館西）

大橋敦子

生あるは父母の恩愛小六月

（大橋敦子・俳人大橋桜坡子の長女 誌「雨月」主宰
平成二十年十一月三日建碑 孝子神社内）

宮野青芭

瀧仰ぐ二つの巖の間より

（名古屋弥生句会の指導者 宮野青芭氏の今寿記念に
昭和五十二年九月十八日建立 大菩提寺本堂前）

聴秋

孝の名もひびきてすずし滝の音

（昭和四年七月吉日 祝掬水樓新築 十八楼以下埋れて不明）

河東碧梧桐②

明るくて桃の花に菜たねさしそふる

(親孝行のふるさと会館西)

山田麗眺子

滝壺の水おのづからひとすじに

裏面 昭和六十三年四月吉日建立 伊吹俳句会 南風有志

(麗眺子・明治三十六年生れ 俳誌南風主宰)

高木旭子

夜晴れして滝山彦のはるかなる

裏面 昭和五十二年秋 養老句会牡丹句会

益井菊枝

一人受く孝子の朱印み堂冷ゆ

裏面 昭和五十二年秋 養老句会牡丹句会

養老駅前合同句碑

養老の滝の近道初紅葉 万木 外

(裏面 三十一名の氏名但し不鮮明)

(昭和三十二年建立 養老句会養老新聞社 養老駅前)

高野素十

多芸輪中大垣輪中夏に入る

(平成十七年九月建立 芹、すずしろ、べにまだら俳句会有志)

河瀬孝道

螢火のひとつは草に戻りけり

(平成十九年六月吉日建立 伊吹俳句会 河瀬宏子)

茂樹

石庭の海渡りゆく秋の蝶

(平成十九年六月吉日建立 伊吹俳句会 柳瀬幸子)

有名人の句 昭和五十五年十月 養老公園開設百年記念冊子「養老」参照

孝行の昔語りや夏小木立 杉 孫七郎

滝壺や酒になるてふ春の水 巖谷小波

多度ヶ峰の神にまします滝津瀬むすぶ 塩谷鶴平

楼閣に落ち合ふ水や木の芽雨 沼 夜涛

応待す四隣の花や雨の中 比叡禽化

(昭和九年から十一年にかけて塩谷氏の案内で碧松桐門人来養)

つつましく滝壺に水瓜食いすつる 久米三汀 (久米政雄)

蝉しぐれ瀧を離れし数歩より 大仏不通 (大仏次郎)

岩を打つまでは虚空を瀧落つる 吉野信子

観瀑の客とおぼしきひさごかな 横山笑粒子 (横山隆一)

(昭和二十二年八月三十日久米氏等一行来養)

養老寺奉納額 谷 木因他 (谷木因全集 昭和五十七年 森川昭編より)

後撰 元禄四辛未歳孟秋上絃述之木因

門松の名所ともなれ滝の山 当国室原住 仙木

やはらかな滝のほとりの三葉芹 // 岩手住 麟谷

音なまる滝の曇や春の雨 // 下笠 // 故筆

何丈の花こぼれ来る滝の泡 江州今和田住 東柳

萊の滝盃二つかさね出せ

当国安久庄住 団石

横枝の藤に別るか滝の先

// 高須 // 嘉祐

さまざまの葉を見よ滝の夏木立

// 下笠 // 風川

来る度に滝見出したり夏木立

// 下笠 // 狙冠

しら滝や拍手はあがる花てまり

江州柏原 // 素人

かたびらも滝見る内にしめりけり

当国大垣住 木屑

誰がかけしふじかたびらぞ滝の松

当国鷲巢 // 不詳

すらすらと落て涼しき滝見哉

// 高田 // 一葦

涼しうぞ走りて滝にうたれ勝

// 高田 // 和行

滝のきれ幾度渡る涼しさぞ

// 高田 // 隣川

滝見るに笠も扇もわすれけり

江州柏原 // 如誰

昼顔のあつさはしまし滝の底

当国大垣 // 家外

滝の水交るにあびよかとり川

江州藤川 // 末雪

涼しさや滝のぐるりのあまた数

当国下笠 // 塊人

いなづまのをれ込む滝の光哉

// 大垣 // 南木

ねぢてある萩にそひゆけ滝の道

// 牧田 // 奉扇

板敷を吹ひやしけり滝の寺

江州南池 // 木竜

桃売のこゑうち消な滝の音

当国大垣 // 小蝶

山雀の滝につれだつくるみ哉

江州藤川 // 奇木

うすらがぬ秋のあはれや滝の音

当国高田〃 山木

此の滝の菊のいはれを語り出せ

江州柏原〃 遅月

手に提し菊ひらきけり滝の陰

〃 柏原〃 百川

初時雨滝見のつれをかぞへけり

当国下笠〃 集学

滝数寄や紙子着ながら罷越す

〃 豊喰〃 一泉

白ふても氷にてなし滝の水

江州藤川〃 華流

つやのある滝の氷柱や朝日影

〃 藤川〃 露月

滝の音や大晦日も同じ事

当国居益下明谷住 幽斤

養老寺奉納懷紙

滝殿は只涼風を枕哉と洛下の貞室此の山によみ残せり

ぬしは行て流れは絶ず春の桜の浅芽が秋にうつり卯花の白みを梅にはやめてことし睦月

半雪の滝見むと此観流軒の松風にかり寝して山下水のしよろしよると落る音を聞し夜

水のあるじの水にたはれていへらく 所々の風雅を此流にせき留大慈に奉納す 我に巻

頭の句をして一篇の詞あらむ事を乞へり 其の撰を見しにほくは鱗角の梢に雲の日を実

のらせ附句は鳳翼の羅に蘭花をたきものすそれが為のかみに立むは我に物なし しかし

最上川に習ひて いな舟の浪に濯残しもあらば拾はむとあるは躑躅に落り山吹にしな

ふ滝のさま真向に詠め横さまに見ても猶尋佗 清き水上にいざよふ雲を踏ておもほへず

其所のさまを一句に得てかへりしをしみてその定めになせり

時は元禄庚午雨水節白桜下の木因子当時の乾にして書印

見にまはる滝のうしろや露の花

当国大垣住 木因

初春や水新き滝の音

// 飯木 // 南柳

菊水に甘き野老をほり得たり

// 岩手 // 木鱗

それなりに隋ふ滝の柳かな

江州柏原 // 花蹄軒桜三

花うつやしばらく滝の音ほそし

当国垂井 // 木厂

花追々滝いろに成にけり

// 高山 // 申人

滝一重見えすく桃の青みかな

// 明德 // 松風

夏山や梢の滝の短さよ

// 高田 // 李風

日さかなの滝にしはるか蝉の声

江州柏原 // 可ト

六月にうたるる滝の念仏かな

// 柏原 // 林ト

脇顔の涼しや滝の落るかた

当国牧田 // 隋友

しら萩を手折な白き滝見せん

// 押越 // 薄氷

三日月のみなに成まで瀑見哉

江州流木堂 江水

目もあやに落るか散か雪の滝

当国石畑住 吟醉

瀑壺や仏具持来る煤はらひ

当国大垣律門 芦木

前句 滝のながれの所々にわかるる

花の間に都見をろす都人

勢州神戸住 三塚

古響を旅しならふて忘れけん

当国高須 // 女房

粟の穂の動くに細き三日の月

// 下笠 // 集学

姫の笠しばし柳の枝たはみ 勢州神戸住 蘭風

作り出す米を仏にまいらせん 江州米原 以寒

丸めたる妻のつぶりを見に行て 当国高須 嘉祐

葉摘つめの雫や匂ふ覧 洛陽四条 一匙

昼ばかり日のさす岩も菴して 当国大垣 羅牛

山里も酒屋ひとつは賑しく // 大垣 // 不詳

ねぶの木を眠れと蟬やいだくらん 江州柏原流木堂江水

前句 右り左のかはりありけり 当国岩手住 木麟

押結ぶねりその萩のほろほると // 鍛冶田 // 孫友軒

船馴ぬ身をやねさせぬ梶の声 // 高田 // 丹子

しら雪を啼消す富士の時鳥 尾州江崎軒 即林

柏子せぬ音は眠るか小夜衣 当国蜂屋住 寸松

行ながら日南はかるし笠の雪 // 鷺巢 // 空

影法師に酒の匂ひは移らざる // 大垣 // 梅蘂

軒ひくふ夜なかの月はみな兼て 江州柏原 // 桜三

山吹のしなひに蝶のつり合て

五・歌謡

1 養老音頭

作詩 野口 雨情
作曲 藤井 清水
振付 島田 豊

一 養老養老と養老の滝は

裾もぬらせば ソリヤアイヤセ袖もひく

春のあけぼの桜の花は

松のなかから乱れ咲く ソレ

二 養老養老と山ほととぎす

誰と泣く気で ソリヤアイヤセ来たのやら

夏がくるのか木と木の陰に

赤いつつじの花が咲く ソレ

三 養老養老と紅葉のたより

あれは養老の ソリヤアイヤセ恋だより

秋の空とて月ア澄み渡る

晴れてくれぬか心まで ソレ

四 養老養老と白雪とけて

谷間つたいの ソリヤアイヤセ水となる

水ぢや養老の谷間の泉

時にや孝子の酒となる ソレ

五一 重桜を養老に植えて

花が咲くなら ソリヤアイヤセ八重に咲け

花は咲いても咲かりよか八重に

一重桜を植えながら ソレ

六 なぜか高田は素通りできぬ

養老街道に ソリヤアイヤセ関がある

源氏橋越しや養老も近い

風もそよそよ吹いてくる ソレ

七 高田高田と高田の町は

広い狭いと ソリヤアイヤセ言はしやせぬ

養老街道の高田のまちは

ただの一筋町ぢやない ソレ

八 一夜千夜は養老のことよ

明日の夜明けが ソリヤアイヤセ尚なけりや

一夜千夜のこの夜があけりや

またも高田の泣き別れ ソレ

(昭和四年十一月 作)

2 滝の養老音頭

作詩 八島 柳堂
作曲 宮崎 光行
振付 島村 静司

一 養老山々 桜はさかり

滝の音にも それ花が散る

わしの心はわしの心はしぐれがち

ハア ヨイヨイヨイヤサデ ヨイヨイヨイ

ハア ヨイヨイヨイヤサデ ヨイヨイヨイ

(以下 囃子同じ)

二 養老山々 朝霧晴れりや

ぱつと咲き出た 真紅のつつじ

誰に見せよと誰に見せよと咲いたやら

三 養老滝道 もみじに燃えて

孝子しのぼと それ鐘が鳴る

滝も千古の滝も千古の響する

四 わたしや養老で 咲いたる梅よ

主がお山の鶯ならば

枝にとまらせ枝にとまらせなかせたい

3 養老小唄

作詩 河合 信
作曲 佐藤 秀郎
振付 藤間金三郎

一 ござれ聞きましょ音がする

滝の都の舞の音か

天津乙女の戯れか 調べも妙に

聞いたか聞いたか こだまする

ソレ こだまする

二 ござれ聞きましょ音がする

谷間にひびく滝の音

その名も嬉し養老の玉しぶき

なつかしなつかし 玉しぶき

ソレ玉しぶき

三 ござれ聞きましょ音がする

大和島根に鳴り響く

わしが国さの源丞内 滝の水さえ

すてきなすてきな酒にする

ソレ酒にする

四 ござれ聞きましょ音がする

永遠に絶えせぬあの流れ

汲んだ孝子の土産は 父知るのみの

うまいぞうまいぞ謎の酒

ソレ謎の酒

4 養老音頭

作詩 野口 雨情
作曲 藤井 清水

一 滝のお水はどうどう

美濃の養老はアノ滝で持つ

滝は紅葉と花でもつ

イヤサヨイヤサ 孝子の徳でもつ

二 滝のお水はどうどう

養老娘はアノ花紅葉

滝でみがいた肌じゃもの

イヤサヨイヤサ 御酒のもととなる

三 滝のお水はどうどう

落ちて流れてアノ流れては

高田うるおす水となる

イヤサヨイヤサ 御酒のもととなる

※この他にも、以下のような歌謡がある。

瓢箪ブギ

作詩 高橋掬太郎

作曲 江口夜詩

振付 糸井川益一

養老音頭

作詩 高橋掬太郎

作曲 江口夜詩

振付 藤間金三郎

養老ものがたり

作詩 成瀬左千夫

作曲 和田三里

六. その他の石碑

1 養老公園碑

松方正義題額

皇帝御極之十三年(明治十三年) 海内寧謐(静か・おだやか) 朝野殷富(栄えて豊か) 百廢悉舉(しつぎよ) 於是岐阜県多藝群耆紳相議請公園(長老)

於官 蓋承皇上與民偕樂之意也 是歲十月養老公園成 耆紳等大開宴席會 名士豪族落之

按(あんずる)二元正天皇養老元年幸多度山 觀美泉明年再幸焉(えんや) 後二十餘年 聖武天皇 幸伊勢轉入美

濃觀之 從臣大伴東人大伴家持獻歌 載在萬葉集 嗚呼二聖以萬乘之尊、(山路の険しさま) 經崎嶇之路者豈事

遠近縱耳目之欲 蓋將闢靈境 搜勝区與衆庶偕其歡樂也 此地茂林蓊葱花辨点綴(細い草の草米が群がり生え(点・点)なく) 岩石不

必凌厲而秀潤 遵逸飛泉不必激越漾清冽 憑高而望西南 峰巒重疊翠色可掬(すく) 是濃勢二州(美濃伊勢)

也 東北一望平曠良田万頃素練隱現 邨落林叢 是揖斐長良木曾三大川也 鸞輿之臨幸留

名於史編 不而宣乎、宝曆中州岡本某築先千歲樓於此以為遊息処 四方過客以時來賞、其名

聞於天下 盖百数十年俟 棟宇朽壞柱楹傾欹 加以林樹剪伐 道路榛蕪 欲求二聖之靈蹟不

可得也 於是本郡耆紳相謀釀資金數百金 大興土木修治荒廢 架設橋梁 補植花卉 疎通泉

脈 樓臺則更其梁桶 亭榭則理其欄楯 傾者扶而直之 欠者易而新之、以十三年一月創工

至十月竣工 是雖吾聖上洪恩之所逮 而亦未嘗不由耆紳諸子之克成厥績也 十八年七月余

遊西京 順途過養老之山 宿千歲樓三日作觀瀑記

（しやうさい）

詳載其勝狀 然未及公園建設

始末今

相距十三年耆紳等協謀欲建碑於公園 以誌開設之功

（しるす）

使人來求余文、嗚呼郡県皆置公園

（つとむ） 莫

以勝景著焉 而其留一千有餘年之聖績者此公園為、然余得安得不銘而傳之乃銘曰

多度之山

（たつ） 鬱茲秀潤

養老之泉

甘若美醞

（かました酒）

菊水清冽

盛夏嚼冰

愈病除痛

同解

宿醒 翠華巡遊

異境益顯

聖言褒揚

煥燦古典

（光り輝く）、濃有孝子

稗史所傳

養親供旨

酌斯美泉

真假勿究

芳流萬古

事關名教

豈比齋語

公園如關

衆庶歡娛

山吐祥

（あい） 霽

泉沸靈珠

遊焉息焉

子是偉遊

茲撰銘辭

永勒貞石

（もたらす・送る）

（刻む）

（永遠に変わらぬ石）

明治三十一年戊戌六月

正六位 依田百川撰

巖谷 修書

この碑は明治十三年十月十七日、養老公園の開設を万世に伝える記念の碑である。養老公園開設の沿革は、明治十二年六月大蔵卿松方正義公が勸業普及のため岐阜県へ遊説の折、県は公の旅情を慰めんと養老の景勝へ案内し地方の有力者を招集し勸業普及の講筵をしいた。岐阜県令小崎利準氏はその席上松方公から養老公園開設の命をうけ、養老郡内から十名の有力者を選び養老公園開設發起人を委嘱した。明治十三年一月から県の技師が出張し測量を始め、同三月末日測量が終り計画が成るや直ちに着工した。

一方開設資金を得るため發起人の外に郡内七十五名の人々に県令から開設担当委員を委嘱し、それぞれの資金に応じ寄附金を仰付け資金約五千円が集まった工事は同十月竣工し養老改元の記念日をとし同月十七日盛大な開園式が挙行された。そこで公園の維持管理のため、小崎県令命名の偕楽社を組織し、会費年額十円の社員を約百名募り、その浄財を以て之にあて衆智をあつめ、風致を保護し、休憩飯食施設の誘致指導、桜楓の植樹など公園としての体裁整備が進められた。然るに開設十七年後の明治三十年頃に至って養老公園開設發起人はもとより偕楽社員の多くが既に歿し偕楽社での公園維持が困難となり、遂に養老郡営に移し、郡費を以て維持管理をはかるところとなった。この記念碑は偕楽社設立当時の懸案であったが果たされず、郡営に移管後の明治三十一年郡費を以て建碑された。

2 岡本喜十郎翁記念碑

養老開設者

岡本喜十郎翁記念碑

陸軍中将上田太郎書

裏面 昭和三年二月七日建設

発起者 高田町青年団

この碑は、養老開発の先覚者岡本喜十郎代々の顕彰碑である。初代岡本喜十郎翁は、今から約二百五十年前寛保年間に養老開発の大志を抱き、一七七一年明和八年三月許可を得て薬湯（温泉）を創業し、二代・三代・四代と苦心その経営を続行、その偉績はやがて明治十三年に至って養老公園の誕生をもたらし、郷土の繁栄に不滅の恩沢を残された。昭和三年高田の青年団田中義一氏が主宰し建碑された。

3 渋谷代衛翁紀功碑

從二位勲四等侯爵德川義礼篆額

美濃著姓渋谷代衛君 (住人) 既歿之七年二月 朝廷賜銀盃一個於家 賞其遺功 於是其子豐之助 (二男中島氏定嗣)

具狀至啓 舅谷如意翁泣請曰 鄉人將為先考勒石於養老公園以伝不朽 願先生為之文 舅以 (申す・話す)

耄老至老辭命啓代之 謹按君之功可紀者有三 日設鄉校也 日開公園也 日施防水工事也 (老年) (渋谷啓) (考ふる) (おん) (設ふる) (刻む) (開) (堤防組合・水利士工会)

君旧多芸郡大野邨人家世里正、初朝廷頒學制 君首捐別邸 充校舍 雇師教兒童數十名給書 (明治六年學生頒布) (寄付する)

籍筆紙、庇器用者十年邨民賴惠 養老勝蹟荒穢日久 大官某氏嘗來遊慨之 勸県令修治 県 (治める・備える) (たんと) (よごれる) (欺く) (借業社)

令謀之君等 君唱導同志釀金購地 新闢坦途 構樓其上 雜植櫻楓 以為遊息之処 設法永 (平坦な道) (敷)

存 郡之地形以牧田川分南北 其南則 除多度山麓高原 揖斐津屋両川東西奏之 金草川横 (借業社)

亘其間 合流牧田川 外環以大垣 号曰多芸輪中 而輪中又分為數区 多築小堤以備大堤潰

決 其費皆出于邨民 封建世公邑藩封犬牙相錯 賦課輕重失宣 土功議多阻不行 明治中 (於・より) (むじ) (難所)

興百度釐革 君以為不及此時改旧慣和同共濟尽力大堤 則不能意免昏墊之害也 乃巡遊諸村 (改める) (陥没する)

歴説耆老 皆頑然不応 君百方曉諭 久而後悟 諸県創水利土功会 謀期十年修築 每歲議 (老人)

決 先其要衝 漸次及餘 遂得竣功 十七年夏木曾長良揖斐三川暴漲 各郡交 為一大湖 (重要な地点) (明治十七年七月杭瀬川金草川相川・泥川・大谷川大増水大牧新田破堤徳田新田大跡新田入水)

県令大憂之 將上京請政府救濟 率君同行君詣諸要職 訴災民窮狀 辞旨惻惻 政府為發金 (従う) (まことに・憐む)

数万円賑之(施す) 盖君為人温厚勇干義(思ふ) 事親孝 家門雍穆(慎む・和む) 僮僕訴々如也(下男・召使(不幸なし)) 郷党有争訟数年不

決者 籍君一言而解以故特為名古屋大垣兩藩主所優遇(當附する) 前後捐私財五萬圓 晚年得病(歲月の長こと) 荏再

不愈 又遭大震壞屋 乃集餘材再築(約十年間) 痺陋僅蔽風雨(低く狭い) 名曰彌縫庵 取國音與貧乏相近也 及

没囑家人曰 我私謀利世為家産 其愧干租先 我死汝等必薄葬 勿使重得罪矣(段定の意を表わす助字) 遠近聞者

無不痛惜焉 君諄政貞 号枕江 考代右衛門 妣中島氏 以文政七年三月二十五日生 明

治二十九年八月十八日歿 寿七十三 葬邨之覺林寺塋域(墓地) 配宇佐美氏 生七子 男豊之助(二男)

理兵衛・孝次 理兵衛承家 豊之助・孝次竝出為人 後三女皆嫁餘天啓辱列宗末(早くから) 夙欽君(三男)

功 又感哀褒之恩 乃承舅意而叙之 且係以銘曰(開根家)

多度之山 神瀆涌焉 翠華曾幸 嘉瑞紀年(天子の應(かさねる)二度の行幸)

君謀復勝 乃治乃宜 卉木改色 林巒如妍(草)(峰・也)(なまめかしい)

教我子弟 陂我河川 利民濟物 厥德無愆(堤)(あやまち・とが)

豊碑屹立 在彼山巔 石或可泐 盛名不騫(瀕り(合う))(過り・欠点)

明治三十六年三月

從六位勲六等

渋谷 啓撰

正二位

日下部東作書

裏面

明党年来懷徳恵

(仲間：みんな)

朝章(あさしやう)身後賜恩褒(死した後) (死後に朝廷より銀杯を賜った)

斯翁功績將何比

養老之山千古高

近江族姓 従四位 谷 鋏臣 題

4 日比氏遺愛園亭記

從三位勲三等岐阜県知事小崎利準撰

亭在養老山千歲樓之下 日比直泰君先考克忠翁之所構也 蓋養老山之勝槩(しやうがいの おもむぎ)以千歲樓為最(最上・最高)

四時登覽者皆焉 万延年間樓主失産樓殆頽廢 翁之深慨(あはれ)之厚資購之大加修治 又起一亭其下

瞰(かん)輒盤桓終日以為娛樂此亭是也 明治十三年郡邑士申官、拋山之勝設公園 釀資興功 正(見下す)

泰君喜曰 此先人之遺志也 樓宇園庭拳婦之公園 不受其直(代価)而獨留一亭 曰此先人之遺愛

不可不存也 衆感其志重 葺治(しゅう)之完好如故 越明年余適至公園登千歲樓 俯瞰園庭則孤亭

傲然在樹 嗚呼杖屨衣巾之微 乃先人手沢之所存 孰不敬重之(私) (たまたま) 矧其大者乎 直泰君之

脊々乎(けん けん) 此亭宜矣 顧此地之勝 昔時賴以不荒廢以致今日者 皆克忠翁之賜也 翁之為徳大

矣 豈特一小亭乎 乃為記以告後之來遊者

明治二十四年十月

岐阜県華陰散人 神谷道一書

裏面

此の亭は多芸郡上多度村字小倉日比三郎右衛門克忠之を造設せり 其男日比四郎三郎直泰その父遺愛なるを以てこれを保存し事実を石面に刻してもって永く後世に伝うるなり。

5 孝道發揚之碑

孝者百行之基

邪見倫盜(人の道)は貧困自滅の因縁

慈悲惻隱(そくいん)は富貴寿の基也
(い)たわしく思う(情)

この碑は孝揚会の主宰者日比辰三郎氏（養老町高田出身 東京在住）が建碑

6 十三代横綱鬼面山谷五郎顕彰碑

鬼面山谷五郎小伝

第十三代横綱鬼面山谷五郎は 文政九年養老山麓鷺巢の農家に生れた。幼時から力人に勝れ初め京都力士となり 二十五歳の時 江戸の相撲武隅部屋に入門して修業した 安政四年徳島藩蜂須賀候に抱えられ 慶応元年大関に昇進 明治二年横綱免許を受けたが 翌三年引退 明治四年七月二十三日四十六歳を以って病歿した

鬼面山は全盛時六尺一寸五分（一八六糶）三十九貫（一四六疋）の巨漢で、よく米十二俵を括つて一氣にこれを担ぎ上げる程の怪力を有した 入幕後十七場所十四年間勤め 取組総数一九一、勝一四三、引分一六、負二四、預八の輝かしい記録を残した一面孝心厚く郷土を忘れず 親の墓を建立、産土の神社に石燈籠を寄進する等その雄名と善行は永く伝へられて尽きないであろう

昭和四十二年三月

養老町鬼面山谷五郎顕彰会

7 高橋先生之碑

高橋次兵衛 名千里字土驥(俊馬) 雲華堂其号 濃州多芸郡栗笠人也 博綜衆芸(多くのものを集める) 最精尊円親王

書法 又善謡曲(うた) 就而受業者凡数百人 安永四年乙未八月十九日歿 歿後七年 門人胥議立(みなで談し合ひ)

碑 請余銘之 余嘉其敬師之厚至今不衰 乃作銘曰

芸之有六 書居其一 前言往行 因字以述 土驥篤好 手不(筆を措く放つ)積筆 取法名家 遵美俊逸

弟子追慕 不忘其師 同心戮力(ちからを合わせる) 爰樹翠碑(みどり) 求銘於餘 余亦何辞 勒之在石(刻む・彫る) 不朽可知

天明元年辛丑秋八月

尾張 岡田挺之撰

藤 公熙書

8 當々先生寿頌之碑

當々川内先生 名泰字交通 致仕称自適 (官職を辞す) 我尾張支封高須藩之世臣也 初先生職在武弁而所 (武官)

好則文 老而賜加秩 (扶持) 為師範乎学校 性冲漠無朕 (ちゆうばくむちん) 不与物相競焉 教人也 淳々己也 (じんじん) 翼々 (よくよく)

惟以獎譽後生自任 實為美濃領袖年七十余 告老遺榮而退 而景慕者益進 (試みる・味わう) 中

有老懶与筆硯隔世之語 然余謂桑榆之本光 遠踰長庚之初輝 (感える・移る(方向)西 季節秋) 文化中先生奉職在東武四谷邸

余先人亦附屬於侯家 揚家而在任於同邸、當時余尚幼朝暮師事 先生特象啓迪 (かたじめる・ならう(教え導く)) 爾來數十年

徒憶恩充報屈焉 (かかむ・従う) 今茲先生九十有一猶教育生徒如故 於是親灸之徒相謀 將樹寿頌之碑以報

謝於先生令余記其由 (かかむ) 嗟世之建碑 以頌讚其德者 必在其蓋棺之後 (かたじめる) 而其人親視之 豈不振

古絶 無之一大快事矣哉 遂自忘謏劣 (せんれつ) 敢讚先生 天縱之德寿 聊記什一固不溢美也頌曰 (十分の一)

天縱仁壽 俾熾而昌 (益する(盛ん) (栄える))

老益堅若 育英裁狂 (益する(盛ん) (栄える))

箇滿腔子 (腹の中) 何屬樂水

平素所養 可知而已

嘉永六歲次癸丑秋九月之吉

門人尾張世臣 深田精一謹撰并書

9 立川勇次郎君碑

君文久二年二月二十日を以て大垣に生る藩士清水恒右衛門君の第二子後同藩士立川清助君の嗣(あとつぎ)となる 君幼にして穎悟(えいご)成童より育英の事に従ひ 旁ら法律の学を修め弱冠にして弁護士試験に登第し明治十九年業を東京に開き頗る(すこぶ)令名あり 夙に時運の大勢を洞察し 翻然(ほん)決意身を電気事業界に投じ 同三十二年京浜電気鉄道会社を創設す 實に関東に於ける電気鉄道の嚆矢(こし)たり 尋いで東京電力会社を起し 水力電気事業に先鞭を著け 又照明の忽(ゆるかせ)にすべからざるを察(はじまり)し 同志と共に東京電気会社を組織して電球の製造に一主面を開き 或は支那に対する電気企業の必要に着目して支那興業会社を創立し 或は電気博覧会を開催して 電気知識と應用との普及を図り 或は日米両国電気企業家提携の緊切なるを覚り志軀(ていこ)を挺して 米國に航し四方に勤説して陰に国交に裨補(ひほ)せるが如き 斯界の開發進展(かいはつ)に努力せること牧拳(ぼけん)に逞ならず 就中兩宮敬次郎と力を協せ 東京市街鉄道会社を創設し 紛々たる群議を排して乗車賃金三錢均一論を提唱 所謂均一制度を確立せるが如きは 蓋し我国交通史上に特筆すべき偉績たり 更に東京大阪間に高速度電気鉄道を企畫(かく)し交通上に新機軸を出さんとし 明治四十年以来二十年一日の如く其の達成を期して止まず 亦以て君の志の遠大なりしを知るべし 晩年郷里に養老鉄

道会社を創設し後揖斐川電気会社を經營するや其の動力を電氣に改め 又大阪への送電を決行して長距離送電の濫觴(らんしやう)を為し 志業略成るに垂んとして大正十四年十二月十四日病を以て東京に歿す 君資性剛毅果斷事に当りて惑はず一路所信に直往し毀譽得衰毫も意に介せず 活眼時勢の趨嚮(すうきやう)を觀 企畫概ね一世に先んず 其の事に従ふや 精勵其の人に接するや和澤深酒(しゆんしゆ)の誘掖(ゆうえき)を受くる者皆其の徳に服せざる莫し 君忙裏閑あれば乃ち園芸謡曲に悠游(ゆうゆう)せるが如き亦以て其の為人を想見すべし 今や君逝きて三年君を追慕するの士胥謀り君が事功行狀の梗概(あらしじ)を敘し 碑に勒して養老山麓に建て以て稜昆(ろうこん)に傳ふと

伯爵戸田氏共篆額

文学博士 南条文雄 撰文

百 鍊 大野 鉄 書

昭和二年十二月十四日

この碑は養老鉄道の創設者立川勇次郎氏の顕彰碑である。氏は我が国電氣事業界の先覚者で 晩年に郷土西濃の開發のため養老鉄道を起し 大正二年に大垣養老間、大垣池野間に汽車を開通し 永く山間僻陬のまま埋もれた養老の景勝が一躍天下の觀光地と肩を並べ 四方遠来の客を迎えるに至り、大正八年養老桑名間、池野揖斐間の工事が成りここに全線の開通を見たつづいて大正十一年揖斐川電気会社を創設し翌大正十二年五月その動力を以て養老鉄道を電化させた。大正十四年十二月十四日歿、六十四才。

1 日本武尊當藝野遺蹟

日本武尊伊吹山(山)の荒ぶる神の征伐の時　さんざんな目に遭い　その上水雨にうたれ　風邪
であろうか　高熱で病重く息絶え絶えになって山を下り　関ヶ原の玉倉部の清水で休まれ
牧田川の狭間を抜けて　養老山脈を南下される。養老山麓當芸野の千人塚という所に石標
が建っている。

古事記は尊當芸野に至りましますときに「我が心恒(つね)は虚(そら)よ翔(かけ)り行かむと念ひつるを　今吾
が足歩まずたぎたぎしくなりぬ」と詔(の)り給ひき　其地(その)を名づけて當芸(たぎ)というたとタキの名及
びタギの地名がここに発すると考えられる

更に古事記は大和の故郷を想って「倭(やまと)は国のまほろば　たたなづく青垣　山隠(こも)れる　倭し
美(うる)はし」と国思歌(くにしのびうた)を誦い　悲劇の尊は伊勢の能頼野(のぼの)で息絶えて「白鳥となって天翔り去りぬ」
と語っている。

2 元正天皇行幸遺跡

靈龜三年（七一七）元正天皇は不破郡に行幸されるに先だつて、八月七日從五位下多治比真人まひとひろたり広足を美濃国に派遣して行宮を造らせ九月十八日不破の行宮に着かれ相模・信濃・越中より以西の附近諸国司の政情を聴取された。九月二十日多芸郡に行幸して多度山の美泉をご覧になり隋員や美濃国司らを表彰され、不破、多芸二群の当年の田租も免ぜられた。又美泉が出たことは大變めでたいことだと年号を養老元年と改められた。次で養老二年二月七日伊勢、伊賀の国を通られ再び養老へ行幸になった。

3 聖武天皇巡幸遺跡

天平十二年（七四〇）十一月二十六日聖武天皇は桑名郡岩占いわづらのかのみや頓宮から当伎郡たぎに行幸になった。ご滞在は四日間であったが高林に仮宮が造営されたといわれている。

4 その他の碑

① 傷痕之碑

御製

（昭和天皇）

国守ると身をきづつけしひとびとの

上をし思う朝に夕べに

皇后宮御歌

あめつちの神ももりませいたつきに

いたてになやむますらをの身を

岐阜県傷痕軍人会会長渡辺栄一謹書

建立の由来

私達傷痍軍人は傷つき痛みつまづき励ましあい乍ら三十余年の風雪に耐え今日に至る慈に平和の祈りと叫びを傷痍の碑にこめて二度と戦争のない未来を乞い願う

昭和五十二年三月十日 財団法人 岐阜県傷痍軍人会養老郡支部

②吉田寿山翁寿碑

華道池坊総華督 吉田寿山翁顕彰碑

昭和十年十一月 各社中有志一同(二つに折れて並べ建てられている 養老寺本堂西)

③ 養老公園百年記念標板

養老の孝子物語

むかしむかし この美濃の国に貧しいけれど 年老いた父をいたわり それはそれは 親孝行な樵がいました。或る日 薪を採りに山に入りますと 苔むした岩間から 酒の香りがただよってくるのです。不思議に思いながめてみますと酒の味がするので す。喜んでその水を腰のひょうたんにつめて持ち帰り老父にのませますと この上もないよい酒だったといつてたいそうな喜びようです。この父と子の笑いささめく寿 の声がやがて奈良の都にまで聞えてゆきました。

時の帝 元正天皇は「これは孝行の徳を天地の神々がおほめになったのであろう」と仰せになり 御自身 この多芸の野にお越しあそびして 酒になったという その美泉をごらんになり「美泉は醴泉でした。若変りの水です。私自身大へん若々しくなりました」とお喜びになり このめでたい年を記念して 八十才以上の老人に授階や 恩賜があり 孝子節婦を表彰され 年号をわかやく年 即「養老」と改められたのです。

養老公園百年祭

昭和五十五年 養老観光協会 建立

終りに

古くより養老の滝・泉・景観を詠んだ詩歌は実に沢山ある。公園内に建てられているそれらの碑だけでも五十余基を数えるに至っている。碑になっていない作品は普段目の届かないところに隋分沢山ねむっている。それらを出来る限り多く収録したいとの思いから本書を纏めた次第である。一人でも多く見てくださり養老のよさを認識して戴ければ幸甚の至りである。編集に当り次の文献資料を参考活用させていただいた。

濃飛の文学 昭和二十四年三月二十日発行 岐阜県教育委員会編

養老の以志婦美 昭和四十三年七月五日発行 村上弁二著

養老町史 通史編下 昭和五十三年三月発行 養老町

養老の文学散歩 昭和五十五年十月十七日発行 養老町役場商工観光課 養老観光協会

養老美泉 昭和六十年三月発行 養老町教育委員会

田中道全歌集 平成十九年十月発行 養老町教育委員会

養老町文化財保護協会誌

平成二十六年三月十日

山口一易（養老町文化財保護審議会長）

養老の詩歌

附公園の石碑

発行 平成二十六年三月十日

発行者 養老町教育委員会

印刷 サンメッセ株式会社
